

国際交流から得た学生の学び

— 2009年度カンボジア研修報告 —

中山 亜弓¹⁾・谷野 宏美¹⁾・内藤 一郎¹⁾・藤田 小矢香²⁾

国際活動

(2010年11月17日受理)

新見公立短期大学カンボジア会の活動として、2007年スタートした「カンボジア・スタディツアー」を2009年度も実施した。ツアーの内容としては、NGO 団体が運営する支援村等を訪問し、開発途上国の生活環境に触れること、日本人看護師が働いているアンコール小児病院や、地雷障害者等に義肢を提供している施設を訪問し、医療の現状を知ることである。そこで、カンボジアの医療の現状知り、今の自分ができる国際支援・ボランティアとは何か、を課題にツアーを行い、学生とともに考えたので報告する。
(キーワード) 開発途上国, 国際交流, 学生

はじめに

新見公立短期大学カンボジア会の活動として、2007年スタートした「カンボジア・スタディツアー (以下、ツアーと略す)」を今年も実施した。ツアーの内容としては、岡山県に本部を置く NGO 団体が運営する NGO 支援村を訪問し、開発途上国の生活環境に触れること、日本人看護師が働いているアンコール小児病院や、地雷障害者等に義肢を提供している HIB (Handicap International Belgium) を訪問し医療の現状を知ることである。

カンボジアは、観光の国として発展の兆しはあるものの医療的問題は山積みである。保健医療水準の低さ、小児保健の課題、農村からの通院の不便さ等、カンボジアでは医療面での整備が不十分であり、国民の健康は守られていないのが現状である。

そこで今回の研修では、カンボジアの医療の現状知ることと、今の自分ができる国際支援・ボランティアとは何か、を課題にツアーを行ったので報告する。

「新見公立短期大学カンボジア会」概要

I. カンボジア会の目的

この会は、教員を中心として発足したものである。学生への目的は、「世界に目を向け、国際的視野で考える知識と態度を身につける」「人間を対象とした専門職者に携わるための教養と感性を養う」である。

II. 主な活動内容

1. 学内活動

カンボジア会では、カンボジア研修に向け、学内での勉強を月1回実施している。内容は、国際貢献・国際協力に関するもの、カンボジアの歴史や文化に関するものなどの勉強会、実際に現地で活動されている日本人ボランティアの方の講演や日本に留学中のカンボジア人高校生との交流会など、現地研修での学びをより効果的にするための活動を行っている。また、現地子どもたちと交流するために、レクリエーションや日本や新見の紹介をするための準備も行っている。

2. 「カンボジア・スタディツアー」研修活動

岡山県に本部を置く NGO 団体が運営する NGO 支援施設を訪問し、現地ボランティア活動の見学を中心に、学生と現地子どもたちの交流としてレクリエーションの実施をした。今年は新たに、日本人看護師が働いているアンコール小児病院や、地雷障害者等に義肢を提供している HIB (Handicap International Belgium) を訪問した。また、カンボジアの文化を知るために、アンコール遺跡やトンレサップ湖見学も実施している。

2009年度ツアー研修報告 (表1)

I. 研修期間

2010年1月5日から9日の5日間 (現地活動期間は3日間)

*連絡先: 1)看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2
2)鳥取大学医学部保健学部

表1 カンボジア研修スケジュール

日	月日	都市名	行程
1	2010年		08:30 関西空港集合
	1月5日	関西空港発	関西空港よりホーチミンへ【所要5時間20分】
	(火)	ホーチミン着	
		ホーチミン発	ホーチミンよりシェムリアップへ【所要1時間00分】
2		シェムリアップ着	到着後、入国審査。レストランで夕食と説明会
		シェムリアップ	午前：●CVSG地雷障害者支援センター視察 ～学生によるレクリエーションと現地子どもとの交流～
	6日		午後：●アキラ地雷博物館見学 ●カンボジア最大のジャックフルーツ園(開墾中)で植樹作業 ●レストランで「アプサラダンス」を見ながらの夕食
	(水)		
3		シェムリアップ	午前：●クパルスピアン観光～水中遺跡を見学します。～
	7日		午後：●アンコール小児病院ビジターセンター訪問
	(木)		●HIB訪問 ●トンレサップ湖見学 ●オールドマーケット見学
4			午前：①キリング・フィールド、②アンコールトム ③バイヨン寺院、④タ・プロム見学
	8日		午後：④アンコールワット見学、⑤市場見学
	(金)	シェムリアップ発	シェムリアップよりホーチミンへ【所要1時間00分】
		ホーチミン着	ホーチミンより関西空港へ【所要5時間10分】
5	9日	ホーチミン発	
	(土)	関西空港着	到着後、入国手続きを終え、解散。

II. 研修先

カンボジア シェムリアップ

III. 参加人数

学生 12名(看護学科1年8名, 2年1名, 幼児教育学科1名, 看護学科卒業生2名)

教員 4名(うち1名他大学教員)

IV. 研修内容

1. NGO 施設訪問

NGO 支援施設である地雷障害者支援センターと自立村を訪問した。これらの施設は、ツアー初回から訪問している。

まず、センターにて、学生はスタッフから NGO が行っている支援や、施設での生活など話を聞いた。その後、学生と現地の子どもの交流を図った。日本の紹介紙芝居と手遊びゲーム、そして個々に子どもたちと触れ合った。

次に、自立村にて、ジャックフルーツ園開墾作業を行った。スタッフや村の子どもたちと一緒に苗を植え、水やりをした。このジャックフルーツの実はとても高価なもので、収入源の助けになるとのことだった。

(写真1)(写真2)(写真3)

2. アンコール小児病院訪問

アンコール小児病院は、NPO 法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの最初のプロジェクトとして、カンボジ



写真1 子どもたちと交流(日本の紹介)

アの子どもの病気の診療・治療をするために1999年に建設された。この法人は、アジアの生まれにくい児たちの支援を目的としている。また、アンコール小児病院では、現地医療スタッフなどによる医療診療・運営活動ができるように、その教育の場としての医療教育センターの役割も担っており、現地の人々への医療、衛生教育に寄与することも目的としている。

学生は病院施設内にて、アンコール小児病院の活動についてのビデオを鑑賞した。アンコール小児病院には、多い日には1日600人以上の患者が訪れている。症例は、上気道



写真2 子どもたちと交流（手遊び）



写真3 ジャックフルーツ園開墾作業

感染が最も多く、耳鼻感染、下痢、赤痢、腸寄生虫による感染や、マラリアなどである。訪問した午後の時間帯でも、病院の敷地内には待っている子どもやその家族が溢れ、診察の順番を待っている状況であった。また地域医療支援として、病院受診が難しい農村部への地域巡回診療・保健教育活動をしている。この活動では、衛生、栄養、妊婦指導などを継続的に行っているが、それらの知識がないことから病気は減ることはなく、保健・衛生の観念が浸透していないことが課題となっている。

そして、この病院で看護師として働いている赤尾和美さんに会うことができた。学内活動でも、赤尾さんのことを紹介していたため、学生は会えるのを楽しみにしていた。

短時間ではあったが、小柄な赤尾さんから発しているパワーを受けとった。

（写真4）（写真5）



写真4 アンコール小児病院



写真5 赤尾和美さん（下段左から3人目）と

3. HIB 施設訪問

HIBは、地雷障害者と小児ポリオ障害児に義肢を提供・交換し、使用方法等の訓練を目的に活動している。1995年に設立された団体で、エキスパートはベルギー人、ドイツ人の2人だけで、他のスタッフはカンボジア人（政府スタッフと民間スタッフの2種類に分かれている）で運営されている。このスタッフは、義肢を作るチームと、地雷障害者を探すチームに分かれている。主な活動として、郊外へ出向き、地雷障害者やポリオの人々を探し、施設にて義肢を作り、自立した生活ができるよう、リハビリを行っている。義足の作成には約US80ドル必要であるが、部品の交換等は無料でやっている。また、施設内には広いリハビリ

センターがあり、多くの障害者が住み込みでトレーニングしている。

施設入口には、障害者個人が作製した義肢が多く展示されていた。

(写真6)



写真6 HIB 施設訪問

V. 学生の学びと、私たちができる国際支援とは（学生の感想レポートから抜粋）

1. 学生A

カンボジアは日本とは全く違う世界だった。カンボジアに滞在してこの生活が当たり前なのかと思うとなんの支障もなく過ごすことができるが、日本に帰国したときにトイレの便座が暖かいことや、治安もそんなに悪くないこと、子供たちが道路沿いで働いていないこと…そんなことを感じた。私が一番心に残っているのは、私たちよりも幼い子どもが毎日働いてお金を稼いでいることだった。私は両親にお金を出してもらって大学までいかせてもらって、一人暮らしまでさせてもらっている。とても贅沢なことなのだと思う。日本は経済面ではもちろんのこと、健康面・社会面にしても豊かだと感じた。それを無駄使いしたり、命を粗末にしたりして考えられないことだと思う。私の夢は看護師の国家試験に合格し、看護師となり現場で働くことだ。そんな自分の夢を追いかけることができるということも幸せに感じるべきなのではないかと思った。だから私は毎日大切に生きたい。些細なことでもいいから、毎日少しずつ成長できる自分にしたい。

2. 学生B

カンボジアの生活環境は日本とは全く異なっていました。インフラもあまり整っていない、日に100円くらいのお金で生活している人々が大半だそうです。また、食べるものや着るもの、雇用など十分でないところもありました。

日本は物もたくさんありとても裕福なんじゃないのかなという風に感じました。特に、医療については病気になれば多くの病院の中から選んで受診し、誰でも治療を受けることができます。しかし、カンボジアではまず病院に行くということが難しいという事実があり驚きました。交通費が高くていけなかったり、行けたとしてももうそのときには手遅れだったり、入院費が1泊1,000\$したりするそうで日本と大きく違っていました。当たり前のように受けてきた医療はとても幸せであったのだと感じました。

まずカンボジアなどの発展途上国の現状を知ることが大事だと思います。そして、できる限りの範囲で支援団体への募金や物資の提供をすることにより、国の発展のために役に立つのではないかなと考えます。また、自分で見たカンボジアの現状を人に伝えて知ってもらうことも必要だと思います。知っているのと知らないのでは大きな差だと思います。カンボジアのことを知った人が何かの機会に支援をしてくれる可能性もあります。だから、そういったことも大事なことではないかとおもいます。

3. 学生C

アンコール小児病院で働く赤尾和美さんに会えたことにとっても感動した。看護師として、カンボジア全土から遠い道のりを経てやってくる子供たちとその親。彼らたちを温かく見守るやさしさと、健康にそして幸せに生きていってもらうための厳しさを併せ持つ人だと感じた。これこそ日本人なのかもしれない。

看護学科の学生としてできることは、カンボジアの今の情勢や医療問題について考え、世間に問いかけていくことだと思う。まだ、看護師として働くことができないため、募金活動をしたり、現地でお金を使い、経済の発展につなげていくことしかできないだろう。貧困のひどい地域・衛生環境の悪い地域には政府が整っていることも必要だと思う。衛生・医療・福祉についての情報が乏しいために起こっている問題が多くあることに気づいた。学生ボランティアとして、現地に出向き勉強を教えることもひとつの手だと考える。カンボジアの財政をほかの国の者が変えていたり、支配してしまっはいけない。宗教や生活習慣、家族について細心の注意を払わなければならないし、敬意を持って行わなければならないと思う。

4. 学生D

カンボジアに行って、改めて日本は本当に恵まれた国で、私達は本当に何不自由なく生活できていると感じました。日本にいれば、水は蛇口をひねればすぐに安全できれいな水が当たり前のように出ます。トイレやお風呂も紙や水があることが普通で困ることはありません。学校も小・中学校は普通に通り、勉強ができ、大学まで行くことが出来ます。食べ物にも困ることはありません。また、戦争の悲惨さも話を聞いたり、歴史として知っているだけで、地雷の恐ろしさや義足での生活に悩むこともありません。このようにカンボジアと日本を比べると、日本では当たり前のようになっていることもカンボジアでは当たり前ではないこ

とばかりでした。私は4日間を通して本当に戦争もなく、平和で暮らせることが有り難いことだと改めて感じました。また、当たり前だと感じていることも本当は当たり前ではなく、幸せなことだとわかりました。

今の自分ができる国際支援・ボランティアは、まずその国の現状、文化や生活、宗教や歴史といったことに興味をもち、知ることだと思います。興味がなければ何も始められないし、現状などを知っておかなければどんなことをしたらいいのか、今何が必要なのかがわからないからです。また、その国個々の文化や宗教があるために、しっかりとその違いを理解することも大切だと思います。そして、発展途上国を支援するための募金などにも積極的に参加したいと思いました。この他にも、安全な水が飲めたり、食べ物に不自由しないことは本当に幸せなことなので、もっと水や食べ物を大切にしていきたいです。ボランティアは、たった1人の力だと頼りないかもしれないけれど、1人1人が自分ができることを考え行動すれば、少しでも発展途上国ためになるのではないかと思います。

5. 学生E

カンボジアに行って良かったところはたくさんあるが、一番よかったと思うところは自分が今までどれだけ不自由なく生きてきたかを痛感できたことだ。言葉も文化も全く違う国に行って、色々な人と話し、色々な人の話が聞けて、今までの自分にはなかった価値観が持てた。地雷で足や手をなくした人、エイズで苦しんでいる人、何度も売られた子など、テレビなどでしか見たことなく、あまり実感の持てなかった事を実際に目で見ると実感できたように感じる。また、アンコール小児病院で働いておられる看護師さんの言葉で『看護師は怪我をした人だけを看護をするのではないのです。人間一人ひとりを看護するのです。』というのが心に残っている。以前から青年海外協力隊に興味があった私にとって、この看護師さんやボランティアの人に出会った事、そしてこのカンボジアでの様々な経験は本当に貴重な経験だった。カンボジアに行って本当によかった。

カンボジアに行って日本がどれだけ豊かで恵まれているかという事を実感した。電気があってトイレがあって、きれいな水が飲めて、食べ物があって、きれいな服が着られて、そんな生活が普通だった自分にとって、カンボジアの人の生活は、同じ地球に生きているのにこれだけ違うのかと本当に驚いた。とは言っても、私たち旅行者はきれいなホテルに泊まって、おいしい料理を食べて、と何の不自由なく過ごせた。私たちだけこんなにいい食事、いい生活を

していいのだろうかという事をとっても感じた。食べ物を大切に、電気や水を大切にしようと思つた。少しの食べ物、少しの水、電気が使えない人がある、そのことを忘れてはいけないと感じた。カンボジアと比べて、どれだけ日本が無駄遣いをしているか実感した。

5. まとめ

今回のツアー研修では、施設見学と現地の人々との交流が主な内容となり、昨年度行った現地での看護活動（訪問診療の同行、身体測定等）が残念ながらできなかった。しかし、学生の感想レポートから、多くの学びが得られていたことが感じられた。学生がカンボジアの医療の現状を実際に見て、感じることで、今の自分に何ができるのか、彼ら自身が考えることができた。さらに、それら感じたこと・考えたことを周囲へ伝えようとしている。伝える場として、大学のイベント等でのポスター展示・発表をしており、学内外へ発信し続けている。

「カンボジア会」では、2010年度も現地研修を計画している。国際貢献とは何か、私たちにできることは何か、いつも問いかけながら、学生とともに成長していきたい。

文献

- 1) 岡本亜紀, 岡宏美, 杉本幸枝, 矢藤誠慈郎, 難波正義: 学生の国際的ボランティア活動の育成を目指して—カンボジア研修報告一, 新見公立短期大学紀要, 27, 187-197, 2006.
- 2) 岡本亜紀, 岡宏美, 杉本幸枝, 岡本直行: 学生ができる国際貢献—2006年度カンボジア研修報告一, 新見公立短期大学紀要, 28, 183-189, 2007.
- 3) 岡宏美, 岡本直行, 杉本幸枝, 岡本亜紀, 矢藤誠慈郎, 古城幸子: 開発途上国との国際交流から得た学生の学び—カンボジア・スタディツアーの教育効果一, 新見公立短期大学紀要, 29, 75-80, 2008.
- 4) 永尾理恵, 小見山幸乃, 寶田真美子, 岡宏美, 古城幸子, 川崎泰子: カンボジアの訪問診療の実際と看護学生の国際貢献—農村地域での日本NGOによる健康支援活動に同行して—, インターナショナル, 2009.
- 5) 小見山幸乃, 永尾理恵, 寶田真美子, 岡宏美, 古城幸子, 川崎泰子: カンボジアNGO施設で暮らす子どもと看護学生の国際交流体験, インターナショナル, 2009.
- 6) 岡宏美, 古城幸子, 川崎泰子: 学生が行うカンボジアでの現地活動の新たな試み—2008年度カンボジア研修報告一, 新見公立短期大学紀要, 30, 121-125, 2009.